

1

全人口の22%が金さん、 韓国に金という姓が多いワケ

韓国には「^{ナムサン}南山（ソウルの旧市街）で石を投げれば^{キム}金さんに当たる。」という諺がある。それだけこの国には金さんが多い。

韓国には人口の約22%つまり5人に1人、なんと1000万人の金さんがいる。著名人として、フィギアスケート金メダリストの金妍兒（キム・ヨナ）や女優の金所炫（キム・ソヒョン）、歴代大統領には金大中（キム・デジュン）や金泳三（キム・ヨンサム）がいる。隣の北朝鮮にも金正恩（キム・ジョンウン）まで3代にわたりこの国を支配している金一族など金姓の人が多い。

多いのは金姓だけではない。ランキング第2位の「^イ李」が全人口の約15%にあたる約680万人、さらに3位の「^{パク}朴」や4位の「^{チュ}崔」を加えると、実に韓国国民の半数が金・李・朴・崔の4姓で占められている。ちなみに、日本の最多は「佐藤」で約185万人、全人口の1.5%にすぎず、韓国で第10位の「^{イム}林」より低い比率だ。

韓国で同姓の人が多いのは、日本と韓国では姓の数が違うからであろう。日本人の姓は約30万に上るが、韓国には286の姓しかない。そもそも姓とは何だろうか。国語辞典には「同じ祖先から出た一族を表わす語」とあり、その意味は日本も韓国も同じだ。

現在、日本では姓と同義で**名字**という言葉がよく使われる。しかし、本来、姓と名字は異なるものだ。平安の初め、日本では、藤原、源、





平などが代表的な姓であった。しかし、平安の中頃から各地に武士が登場すると、彼らは姓とは別に名字を名乗るようになる。当時の武士の多くは藤原氏、源氏、平氏の一門であり、同姓の他の一族と区別するために、彼らは自分たちが支配する土地の名を通称とし、それが名字の起こりとなった。北条、足利、織田、武田、上杉、毛利などである。さらに藤原氏の一族は、伊勢に住んだ者は伊藤、加賀なら加藤、近江なら近藤、武蔵なら武藤と名乗った。

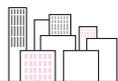
その後も、日本人は既存の姓にとらわれず、明治の四民平等政策により、庶民も自由に名字を名乗ったため、現在のように名字の数が多くなったわけである。

一方の韓国でも、同姓の場合はその出身地で区別するようになる。
ボングァン
本貫である。韓国の姓にはすべて本貫があり、金姓の場合、金海、善山、慶州、全州など285の本貫がある。例えば、姓が金で本貫が慶州の場合は慶州金氏と呼ばれ、姓が同じで本貫が同じことを「同姓同本」といって同じ一族と見なされ、逆に、姓が同じであっても本貫が異なれば別の一族と見なされた。1997年に民法が改正されるまでは、たとえ面識がなくとも同姓同本の男女は、近親婚を避けるため、結婚することが認められていなかった。現在でも、若者たちはナンパで知り合った相手には、真っ先にまず姓や本貫を尋ねるそうだ。

韓国の姓上位 10

① 金 (キム)	21.6%
② 李 (イ)	14.8%
③ 朴 (パク)	8.5%
④ 崔 (チェ)	4.7%
⑤ 鄭 (チョン)	4.4%
⑥ 姜 (カン)	2.3%
⑦ 趙 (チョ)	2.1%
⑧ 尹 (ユン)	2.1%
⑨ 張 (チャン)	2.0%
⑩ 林 (イム)	1.7%

(韓国統計庁調査)



西アジアを中心に世界に広まる イスラム文化，九つの謎

世界人口の4分の1を占めるイスラム教，西アジアや北アフリカの国々には，イスラム教の戒律に基づく独特の風習や規範がある。

その1 女性が髪や肌を隠す衣服を着るのはなぜ？

ムスリムの女性は頭髪を隠し，全身をすっぽり覆う黒づくめの衣装を着るのが習わしである。国や地域によってその厳しさにはいくらかの違いはあるが，女性は近親者以外には髪を見せない，顔と手先以外の肌を見せない，ボディーライン見せてはいけない。

欧米には，これを女性の自由を奪っているとか性差別だとか主張する人たちがいる。しかし，果たして本当にイスラムの女性は抑圧されているのだろうか。イスラムの聖典『クルアーン』には，「神は汝の貞操を守り，汝が美しくあるために衣服を与えた。衣服によって汝は悪から守られ，汝の尊厳は維持される」とある。イスラム教には，人間は欲望を抱きやすい弱い存在であり，男たちは女性の髪や素肌に性的欲望を刺激されやすいという考え方がある。全身を覆う衣装はそんな男たちの視線から女性を守るためなのだ。つまりセクハラ予防，そんな意味がある。

なお，トルコやエジプトなど規制が緩やかな国の若い女性たちは，髪を隠すなど戒律を守りながらも，ジーンズなど欧米風の服装を自由

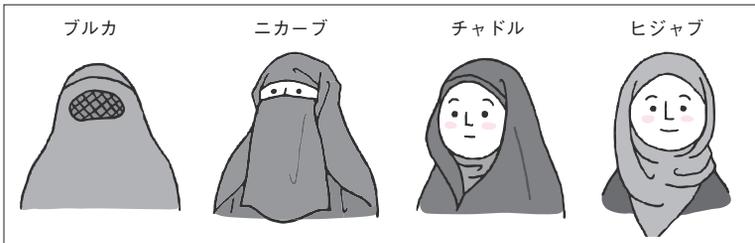




に着こなしている。

また、イスラムの戒律は女性だけに厳しいわけではなく、男性についても守るべきルールを定めており、男性の衣服も肌を露出するものは禁止されている。ただ、露出してはならない部分は、女性は顔と手以外だが、男性の場合はヘソから膝までだ。女性の方が隠す部分が多いのは、女性の方が美しいからだそうだ。

ムスリムの女性が身につけるベール



その2 男性がみんな髭を生やしているのはなぜ？

ムスリムの男たちは必ず髭を生やしているというイメージがあるが、イスラムの教義では男性の髭は必ずしも義務とはされていない。しかし、預言者ムハンマドは言語録『ハディース』の中で男性が髭を生やすことを推奨しており、実際には、ムスリムの成人男性のほとんどが髭を生やしている。髭があることによって、一人前の男性として認められるのだ。

中東に駐在する日本の商社マンや報道関係者にも、イスラム教に改宗したわけではないが、髭を生やす人が多い。髭がないと若く頼りないように見られ、髭がある方が現地の人たちの印象がよくなり、商談や取材がやりやすいのだそうだ。



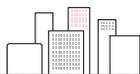
ロシアの民芸品「マトリョーシカ」の ルーツは日本のこけし人形だった！

人形の中に人形、その人形の中からまた人形、そんなユニークな
ロシアの民芸品のルーツが日本のこけしってどういうこと？

体の中が何層も入れ子になっている**マトリョーシカ**は**ロシア**の伝統的な民芸品であり、お土産としても定番中の定番だ。ロシアを旅行したことがなくても、マトリョーシカはどこかで見たことがあるのではないだろうか。

昔のロシアの農村では、「マトリョーナ (Матрёна)」という名の女性が多かったが、「マトリョーシカ」はその親しみを込めた愛称で、日本風に言うならば「マトリョーナちゃん」である。マトリョーナは母を意味するラテン語の「マーテル (mater)」に由来し、「お母さん」を連想させる名である。そのため、マトリョーシカは人形の中から次々と人形が出てくるところから、安産や子宝に恵まれ、子孫繁栄の御利

ロシアの民芸品「マトリョーシカ」



益を運ぶ人形として、母親が嫁いでゆく娘に持たせる縁起物になった。

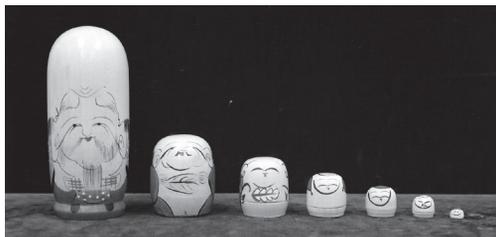
マトリョーシカは1900年のパリ万博に出展され、玩具部門で銅メダルを受賞し、ロシアを代表する民芸品として、一躍世界の人々に知られるようになった。しかし、このマトリョーシカ、実は日本のこけし人形がルーツだという説がある。

その日本のこけし人形とは、神奈川県箱根地方の名産品である**入れ子人形**である。江戸時代、箱根は七福神参りが盛んで、参詣人のお土産として七福神の置物が人気だった。いかんせん7体もある人形はかさばってしまい、持ち帰るのが大変だ。そこで、古くからあった入れ子式の弁当箱をヒントに、七福神を重ねて軽量化した下の写真のような入れ子細工が考案された。これが箱根の入れ子人形の始まりである。

そして、明治の初め、箱根に避暑で訪れたロシア正教会の宣教師がこの人形をロシアに持ち帰り、これをもとにして、ロシア風に頭にスカーフを巻き、エプロンをした農家の娘が描かれた入れ子人形が作られた。これが最初のマトリョーシカである。それ以後、ロシア各地で様々なマトリョーシカ人形が生産されるようになった。なお、モスクワの玩具博物館には、宣教師が持ち帰ったとされる七福神の入れ子人形が展示されている。



箱根の入れ子人形（箱根町立郷土資料館提供）



ブルキナファソなどアフリカ諸国に「一夫多妻婚」が見られるのはなぜ？

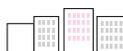
ブルキナファソでは既婚女性のうち、55%が一夫多妻婚だ。マリやセネガルなど近隣諸国もその比率は40%を超える。

一夫多妻婚という、アラブの富豪たちのハーレムのような生活が想像されがちだが、複数の妻を持つことができるのは決してアラブなど一部の国の富裕層だけの特権ではない。現在、アフリカには54の独立国があるが、法律で一夫多妻婚を禁じているのはヨーロッパ文化の影響が強い北アフリカのチュニジアのみで、国により差はあるものの、他の53カ国には今なお一夫多妻婚の風習が残っているという。

とりわけ、この風習はブルキナファソなどサハラ以南の西アフリカの国々に根強く残っており、東アフリカでもタンザニアやウガンダなどは、既婚女性のうち30%ほどが一夫多妻婚の状態だ。

近年、アフリカ諸国の一夫多妻婚の婚姻女性の割合は減りつつある。それでも多くの国では一夫多妻婚の風習が今も続き、それが容認されている。その理由として、結婚は一夫一婦であるべきだというのは、欧米社会の道徳観や価値観であり、アフリカの人々が必ずしも同感していないということもあるが、それよりもアフリカ諸国の高い貧困率が大きな理由である。

貧富の差が激しい国で、もし一夫多妻婚を禁じ、一夫一婦しか認めなくなると、多くの若者が結婚できなくなってしまうのだ。とりわけ、



貧困層の男たちは、結婚のための資金や住居を準備できず、妻を迎えることができないのである。それでも男たちは仕事を見つけて1人だけならなんとか生活はできる。しかし、女性が自立して1人で生活するのは困難だ。そのため、女性たちの中には一夫多妻婚を受け入れ、生活力のある男の妻になることを選ぶ者がいる。

この傾向は農村部で顕著である。広い土地や家畜を持つ男たちにとって、その土地で多くの作物を収穫し、多くの家畜を飼育し、資産を増やして社会的地位を高めるためには、複数の妻とその子どもたちからなる大家族が何よりも有利なのだ。もちろん、それができるのは資産を持った限られた男たちだ。

とはいえ、どの国でも、実際には一夫多妻の大家族より一夫一婦の家庭が多い。しかし、一夫一婦の家庭より一夫多妻の大家族の方が経済的には恵まれているという現実のため、あえて一夫多妻婚を選択する女性たちがいる。

なお、少数の男たちが複数の女性を妻にするということは、その分、結婚相手のいない男たちが過剰になる。一夫多妻社会では、男は裕福な家庭に生まれるか事業で成功しなければ結婚どころか恋人すらできない。生涯結婚できず、一生に一度も性交渉することがない男性は珍しくはないという。



一夫多妻の大家族が暮らすブルキナファソのティエベレ村の住居 ©ALEXANDER BEE

